

# 東欧行政視察記

横芝町長佐瀬哲司

## ソ連に大きな尊敬心

### 安い生活費で最低生活を保障

共産圏ブルガリアの首都、ソフィア空港の入国検査は厳重をきわめ、長い時間を要した。

概して共産圏の国は、自由主義国人に対して厳重のようであるが、これは逆に、自由主義国が共産圏の人々に対して厳重なのかも知れない。とにかく非能率的だ。

空港から市内までは、一直線の道路で、約五十分を要した。

道路の両側にはポプラ並木が植林され、周囲一帯にタンポポが群生し、その花数の多さと見事さに驚かされた。



真っ赤な民俗衣装の地元中学生と談笑する筆者(レーニン広場にて)

へその三

道路の舗装は簡易舗装で、日本のような立派なものではなく、また風景も、のんびりとした絵に描いたような田園風景が続いた。

### 農業国から

### 工業国へ

この国の面積は、日本の三割程度で、人口は八百七十三万、人口密度は七十九人で、日本の四分の一程度である。

第二次大戦迄この国は、ヨーロッパでも経済的には最後進国の一つであったが、大戦後ソ連の援助で農業国から工業国へと急速に発展しつつあり、特に食品工業が盛んで、ブルガリアのチーズは日本のテレビCMでも報ぜられ、現在日本とは非常に友好的な国である。

### 質素な生活

一般市民の生活は、衣食住どれをとっても非常に質素である。自家用車等は、ほんの一部の人達のみであるが、総体的には現在の中国より生活程度は高いように見受け

けた。

我々の泊ったホテルは、日本のニューオータニが資本提携で建てた十九階建ての近代的なホテルで、郊外にひととき大きくそびえていた。

数年前、上町の井上平四郎先生もこのホテルに宿泊されたとのこととて、先生のお話では「ブルガリアの大統領が日本を訪問した際に、東京のニューオータニに宿泊、すっかり気に入って、自分の国に建設を申し込んだ」とのことである。

ヨーロッパ諸国を旅行すると、どこの国でも日本のような共同便所が完備されておらず、閉口するのだが、このホテルでもロビーにある便所の前には、老婆が机に座っており、必ずチップ(五十円)を要求された(共産国の中国では不必要であった)。このようにヨーロッパでは共産国でさえチップが要求されるので、どこの国へ行ってもチップが必要になってくる。

### 女性運転士

翌日は市内の中心街を見学するため、電車乗場まで歩いたが、途中で出会った若い男女の団体は、服装も色とりどりで、共産国的な暗さはなく、非常に美男女の多いのには驚かされた。顔や目に一種の気品があり、東洋人系に東欧の血が入っているた

めではないかと思われた。

電車はソ連製の二両連結で、ほぼ満席であった。バスの運転手は男性だが、電車は脱線しないからとの理由で全部女性。なかなか考えていると感心した。

ハイヤーは基本料金が三十円で、バス、電車は市内全域十円均一である。共産諸国ではこの交通機関をはじめ、住宅・家賃・食糧の三つは、最低生活を保障する意味で非常に安いのが特徴である。

日本のように赤字だ、赤字路線だと騒がない理由は、すべて国営であり、国が責任をもってやっているからであろう。また自家用車が少なく、一般人が電車やバスをよく利用するのもその原因だろう。

### 経済と社会不安

市内の中心街は、レーニンの銅像を中心に広場が形成されており、二階建ての国会議事堂、共産党本部、政府機関の建物、国営ホテルなどが建ち並び、広場は全部石畳で、教会や広場は実に広々としていた。

この国は、トルコに五百年もの間支配され、独立して百十年で再び第二次大戦となり、大戦後ソ連によって解放された国で、一般市民はソ連を大恩人として尊敬していると、ガイドが力強く説明して

いたのが印象的だった。

共産圏の国には衣食はいないと思っていたが、教会の入口に七十歳ぐらいの老婆が二人、参拝人物乞いをしており、また人相の悪い中年の男達が我々外国人の側にきて、アメリカドルの交換を迫るなど、この国はまだまだ経済的には困っており、これが大変だという印象を深くした。

### 国費で学ぶ大学生

昼食後、バスで郊外の大学村の体育施設を見学に出かけた。

この国のスポーツへ注ぐ情熱は相当なもので、特に女子のバレーボールや体操は世界的なレベルにあり、国全体が体育教育に重点を置いているとのことだった。

しかし、見学した大学の体育館や市民体育館は、横芝中の体育館より劣るような施設で、スポーツの強くなる原因が施設ではなく、国費で養成するシステムにあるような気がした。

この国の大学生は、衣食住のすべてを国費でまかなわれており、人口増加を国策としているために学生には妻帯者が多く、子供が生まれると学生でも家族手当を特別支給するとのことと、学生村のアパート群も七階建ての立派なものだった。

一つづー